

10月朝会の話・要約

心を磨く

6月の朝会でも「心」の話をした。「心を磨く」という言葉もそのとき耳にしたはず。私自身、年を重ね「心」の大切さを感じるようになった。

心の象（かたち）は「目」に現れる。今の君たちの目、真剣な眼差しに未来への希望を感じる。先日の「西輝が丘祭」事前指導の時の君たちの「目」は忘れられない。特に3年生は自覚と責任を背負った目をしていた。2年生、1年生は3年生の思いを引き継いでいってくれるはずと確信できた瞬間だった。

さて、部活動の新人大会が終わった。昨日は郡市駅伝大会が行われた。今回の大会の結果には、満足なものばかりではなかったはずである。

私の監督時代の話をする。

卓球部顧問としてのスタートは、新任の宇都宮市立陽東中学校。

全校生徒1,700名、40学級というマンモス校であった。3年目で男子卓球部が県大会優勝を果たしたが、優勝チームを残したまま宇都宮市立横川中に異動。ここでは、10年間お世話になった。

宇都宮地区の最弱チームが県大会出場を果たすまで2年、県大会で3位表彰を受けるまでにさらに1年。そして、決勝に駒を進めるまでにさらに1年がかかった。決勝では見事に敗退。勝つことの難しさを知った。関東大会、全国大会出場まで、異動してから7年かかった。

その後、芳賀地区にもどり真岡東中学校に赴任。2年目で県大会3位入賞。もっと卓球の指導をやりたくて「市貝クラブ」を立ち上げた。真岡東中の子たちを見ながら市貝中の子たちを見ていた。自分の息子たちが卓球をやっていたからしかたなかった。真岡東中時代には、県大会優勝や関東大会、全国大会出場を何度も経験させてもらった。

監督をやっていると、試合の中で「勝負を分ける1本」があることに気づくようになる。いわゆる「手抜き」は命取りになることを身をもって学んだ。だから、いい加減なプレーは許せなかった。

そして、最後は「神頼み」。

卓球部の子どもたちには、いつも「ゴミを拾え」、「返事は明るく元気に」「履き物をそろえろ」、「先生が荷物を持っていたら率先して『私が持ちます』と行動で示せ」、「神様は見ている」「神様は自分の心の中にいる」「『自分は、あのときゴミを拾った、だから神様は私を見捨てない』、と思え」「よい行いを積み重ねろ」。「そこまでしてやっと、勝利が自分の方に顔を向けてくれるということを忘れるな」、と言い続けた。

「心を磨く」ことは、とりもなおさず自分を高めること。そして、高められた自分には神様だけでなく、いろいろな人が味方してくれる、応援してくれるものであることを忘れないでほしい。

「ゴミを拾え」。

それが自分の心を磨き、明日の自分を作るのである。君たちのこれから実践に期待する。